

異世界転生虐待おじさん

二不二

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虐待に次ぐ虐待に手を染め、哀れな被害者たちが嗚咽と涙の海に沈むなか、ただひとり満足気に最期を迎えた虐待おじさん。

常軌を逸した彼の行いを、神は見逃してはいなかった。

「なんとという生き様か。異世界で自らの行いを改めるがよい」

残虐非道の虐待劇が今、異世界で幕を開ける！

※拙作は、一人称の文章の練習を兼ねています。

目次

汚い猫耳娘を拾ったので虐待することにした	1
汚い猫耳娘が拾われて虐待される話	9

汚い猫耳娘を拾ったので虐待することにした

神様に転生させられた。

前世でさんざん動物やら子供やらを虐待したのを見咎められたよ
うだ。

このように言われたのを覚えている。

「お前はとんでもない人間だ。私はお前の人生を見守っていたが、お前は何度他人に涙を流させたか知れない。最期の最期まで、お前は人を泣かせてばかりだった。そのような在り方は到底認めがたい。お前が人間らしい人生を全うするまで、何度でも転生させてやる」

だが、一度生まれ落ちてしまえばこちらのもの。神様は、俺が死ぬまで手出しできないらしい。

「残念だったな。お前はそこで、ヤツラが泣きわめく様を、指をくわえて眺めているがいい」

まだ見ぬ動物やら子供やらが咽び泣く様を想像する。

愉快でたまらない。口元がつり上がってしまう。

「くつくつくつ。今度はどうやって虐待してやろう」

好都合なことに、転生した直後にも関わらず、すでに成熟した大人の身を備えている。それも、年若い二十代の肉体に若返って。

容姿も肉付きも、紛れもない俺自身の肉体である。

お陰で、生活を安定させることができた。おたのしみ虐待について考えるほどの、余裕を得たのだ。

転生して一ヶ月。

すっかりこの生活にも慣れた。

ここの生活は単調だ。

朝。堅く味気ない黒パンを、野菜クズだらけのお粗末なシチューに

浸して、喉に流し込む。

昼。周旋屋で依頼を受けると、そのまま街の外へ出かける。害獣を駆除したり、望みの山菜を採取する。前世では趣味でまたぎの真似事をしたこともあるので、手慣れたものだ。

夜。日暮れ前に街へ帰る。周旋屋で報酬を受け取ったら、食堂で一杯ひっかけろ。ぬるくて薄い——苦みはないくせにやたら麦の臭みの香る——ひどい出来の麦酒だ。平成日本の苦く濃いラガービールに慣れた身には、満足できそうもない。水より安くなければ、決して好んで飲んだりはしない。

「なんて非文化的な世界なんだ。ストレスがたまる一方だ」

こんな時は、何かスカツとすることがしたい。

そう、例えば、小動物や子供に非道の行いをするとか。

——その思いに応えるかのように、その子はそこに居た。

食堂から木賃宿への帰り道。

薄暗い通りの、ひとときわ人気のない脇道。

そこに、がさごそ生ゴミを漁る、薄汚い子供^{ガキ}が居た。

「くつくつくつ。これはこれは、ちようど良い」

子供は、こちらに気づくなり、脱兎のごとくに逃げ出した。もとより周りを警戒していたようだ。

それも当然の話で、捕まればまず緑な目に遭わない。

ここは裕福な地区ではないから、スラムの悪ガキをとらえる警邏もないが、代わりに、お上品な連中もない。傭兵崩れの荒くれ者だらけだ。スラムの子を捕まえたなら、面白半分でいたぶるくらいはするだろう。ちようど俺のように。

「捕まえたぞ。緑に食べてない、ガリガリひよろひよろの子供の足で、俺から逃げられるとでも思ったか」

「……………」

首根っこを掴まれたまま、バタバタ手足を暴れさせて抵抗する。

「くつくつくつ。抵抗しても無駄だ。お前はこれから、この世の地獄を見るんだ」

そのまま宿へと進むうちに、同業者とすれ違った。

これから行われる非道を想像したのだろう。彼らは、ニヤニヤと野卑た笑顔を向けてくる。

それが、いよいよ実感を与えたらしい。子供は何もかも諦めたかのように、ぐったりと力なく、なすがままに運ばれるのだった。

こうして、俺はこの玩具を飼育することになった。生かさず殺さず、なるべく長く虐め抜いてやるのだ。

まずは食事だ。

もちろん、暖かいミルクやおいしい料理のような、子どもが喜ぶような物など与えはしない。

がっかりする食感の、味気のない炭水化物。苦みと臭みを煮込んだような、とてもじゃないが食べられない濁った液体。俺だったら、金をもらっても食べようとは思わない、食事などとは呼びがたい、ただ最低限死を免れるための栄養である。

実際、それが食べ物だとは思えなかつたらしい。子供は、眼前に置かれた食事^{エサ}を、遠い世界のできごとのように眺めていた。

「くつくつくつ。どうした、驚いて声も出ないか。それがお前の食事^{エサ}だ。どんなに嫌がっても、食べるまでここから出さないぞ」

後ろ手に、扉のカギを閉める。

ガチャリと錠の落ちる音がして、子供は、びくりと肩を震わせた。

これから始まる虐待の気配を感じ取ったのだろう。おそろおそろこちらを伺うので、ニヤリと愉悦の笑みを返してやる。

すると、どうあつてもコレを食べねばならぬと悟ったと見える。おそろおそろ臭いを嗅いで——酷い臭いに耐えかねたのだろう——じわりと涙を浮かべて器に口を付けた。

垢と泥水で黒ずんだ首筋が、小さく上下する。汚水のような液体を嚙下したのだ。

ひどい味だったに違いない。涙をこぼし、嗚咽を漏らしながら、それでも懸命に汚水をすすする。

「どうだ、不味いだろう。だが、それだけがお前の食事^{エサ}じゃあないぞ。こつちもちやんと食べるんだ」

と指差したのは、味気のない炭水化物——この世界の住人がパンと呼ぶ何かである。

一般的に、脱色された穀物ほど身体に悪い。例えば、いわゆる『江戸病』の原因は、玄米から白米に切り替えたことによるビタミンの不足にある。黒いパンもまた、堅くて岩のような食感がするが、それさえ我慢すれば栄養は豊富だ。

コイツに与えるのは、もちろん栄養豊富な黒パンではない。白っぽい、パンのような何かである。

平成日本を生きた俺にとって、口が裂けてもパンなどとは呼べない、はつきり言つてクソ不味い食物。しかも、カロリー以外の栄養を持たないグルテンの塊。いわば黒パンと白パンの悪いところ取りをした粗悪品である。

「くつくつくつ。臭い液体と、不味いだけのグルテンを食べて、えづくが良い」

「……………つ」

声を押し殺して泣きはじめる。

嗚咽を漏らし、その度にこぼれそうになる汚水とグルテンを、あふれる涙で懸命に飲み下す。まるで、パンのひとかけら、汁のひとすくいでも残せば、直ちに折檻が降ってくるともいうかのように。

——よく分かっているではないか。

だが、その見立ては好意的に過ぎる。

「食ベきつたか。だが、それで終わりじゃあないぞ。もつと涙を流せるよう、こいつもくれてやる」

空になった器に、なみなみと水を注ぐ。

水には不純物が浮いている。さもありません。劣悪な衛生環境下手に入る水だ。その品質などたかが知れている。俺なら、とてもではないが口を付けたいとは思えない。だが、生ゴミを漁っていたコイツにはお誂え向けだ。

「……………つ」

子供は一息に水を飲み干した。

大変不本意ながら、この不衛生な水は、コイツの口に合っていたらしい。人心地ついたように、満足げな息をつく。腹が膨れた為か、瞼まで重そうに落ちてきた。

——それがこの上無く腹立たしい。

「おい、何を勝手に寝ようとしている。ここをどこだと思ってる」
「あつ……ごめ、ごめんさいっ」

それが初めて耳にする、ソイツの声だった。

耳障りな声だった。あらゆる苦難を舐めてきた貧困街の孤児独特みなしこの、恐怖に震える声だ。

「チツ。臭いな、ひどく臭う。鼻が曲がりそうだ。汚物は消毒しなくちやなあ」

「ひっー」

子供の瞳が恐怖に濡れる。

「オラア、その汚いボロ切れを容赦なく捨ててやる！」

「やめてくださいっ！ これしか服がないのに——あつ」

年端もいかない子供の抵抗など、たかが知れている。

もとはフードであったであろう、ズタズタのボロ切れ。それを頭から被って、余人の視線から隠れるようにしていたのを、無遠慮にはぎ取る。

「ほお。ここそしているとは思ってたが、猫人族か」

「ひっ……」

子供は身を縮こませて、恐怖にうち震えた。頭部の猫耳はぺたんと伏せ、尻尾は股の間にもぐりこんで震えていた。

——猫人族。それは数ある人種のなかでも、もつとも嫌悪される種族である。

それというのも、犬人族や短耳族と比べ、社会性が薄いからである。自分勝手に、相手の都合を考えず、勝手気ままに振る舞うのだ。多くの猫人族は、他人の目など気にしない。

それがどうした事か、この子供は、他人の視線に怯えきっている。

——実に虐めがいがあるというものだ。

「ほお。臭いと思つたら、耳と尻尾から臭つていたのか。……チツ、やはりバツチイな。触っただけで手が黒く汚れる」

「いやっー」

頭を抱えてうずくまる子供をむんずと掴み上げると、水を張った桶に放り込んだ。

そして、掌を上に向けて魔法を発現する。

この世界に来てから、知らないうちに身につけていた便利な特技だ。転生特典というやつだろうか。

「へ火球」の魔法だ。どうだ、恐ろしいだろう」

火球を浮かべた掌を見せつける。

火球を押しつけられると思つたのだろう。ぎゅつと目をつぶって、来たる悲劇に少しでも身構えようと、歯を食いしばる。

悲壮な覚悟を浮かべた顔の横を、掌は通り過ぎ、桶の中に飛び込んだ。

ジュウと音がして、けれども、火は消えない。魔力とやらを供給し続ける限り絶えることのない、いわば便利な照明兼バーナーなのだ。

「くっくっく。顔を焼かれるとでも思つたか？ 俺はそんな単純な虐待はしないぞ。もつとじわじわとお前を苦しめてやる。ほら、水がどんどん熱くなってきた」

ひんやりと気持ちの良かった水は、今では熱湯へと変わってしまった。

それにずっと浸かっていたら、煮え殺されるのは必定。だが、俺はひと思いに殺したりはしない。だんだんと温度を上げて、けれども、死なない程度に抑えておく。「生かさず殺さず、長く苦しめる」がモットーなのだ。

「熱いだろう？ だが、逃がしはしない。熱湯攻撃をたっぷり味わうが良い」

そして、俺の嗜虐性はこれに止まらない。

熱で体内を攻めるのに飽きたらず、体表までも攻撃することにした。

俺が取り出したソレに早速気付いた子供は、「まさか」という目でソレを見やる。

「ほう、気付いたか。そうだ、これは使い古しのボロ布だ。あとは捨てるしか使い道のないゴミ同然のコイツで、お前を苦しめてやる」

熱湯に浸した熱々のボロ布で、激しく子供の体表を擦りあげる。

「痛い、痛いよっ」

「当然だ。お前の体表の細胞組織が剥離しているのだからなア！」

かつて子供の体表を構成していた細胞が、ボロ布に削り取られる。

ボロボロとこぼれていく自身の一部を見て、喪失感からか、子供は呆然とした阿呆面を晒す。

どれくらいそうしていただろうか。

汚らしい身体は力一杯こすられた為か、はたまた煮られた為か、茹でタコのように真っ赤になって痛々しい。

身体の内外から攻められ、ぐったりした子供の首根っこを掴んで、桶から引っ張り上げる。そのまま部屋を水浸しにされても困るので、乾いたボロ布で乱暴に水分を奪い取った。

「見ろ、これが何だか分かるか」

「……………っ！ わたしの服！」

「おっと、これを返してやるわけにはいかんな」

「……………どうするの？」

子供は、困惑した様子で一張羅を見つめている。

「なに、簡単なことだ」

先ほどのお湯責めで、身体を攻めた。次は心だ。

「捨ててやるんだ。こんなふうにな」

両手に魔法を発現させる。

右の掌には火球を生んで、アイツの一張羅を燃やし尽くす。

左の掌からは風を生み出し、灰と煙を窓の外に追い出す。

「ひどい、わたしの服が…………」

「ずいぶんと大切にしていたようだな。だが、お前にはもう服を選ぶ自由も無いと知れ。——ほら、これがお前の服だ」

投げ与えたのは、お下がりの服だ。コイツを捕まえた帰り道に、露

天商から適当に買った中古品。コイツに新品の服など買い与えるはずなど、もちろんない。

「こんな……こんなことって……」

へなへなと腰砕けになって地面に座り込む。

「おっと、そこで寝るつもりか？ それは許さん。お前なんぞ、畜生同然の寝床が似つかわしい」

部屋の片隅に設けていた、藁の塊を指差す。馬小屋と選ぶところのない、畜生の寝床である。

信じられないと言わんばかりに、呆然とそれを見やる。

「チツ、グズめ。さっさとしないか」

痺れを切らした俺は、首根っこを掴んで藁へと放り投げる。

しばらくもしないうちに、めそめそとすすり泣く声が聞こえていたが、すぐにそれも聞こえなくなった。どうやら、虐待に次ぐ虐待で心身ともに弱り果てていたらしい。

頬を伝う涙は、きつと甘露の味がするのだろう。

まるで現実という地獄から逃れるかのように夢の世界に耽溺するガキの寝顔を眺めていると、心の底から愉悦があふれてくる。

幸せな気分になって、俺はニタリと邪悪に微笑んだ。

「くっくっく、地獄へようこそ」

汚い猫耳娘が拾われて虐待される話

毎日が生き地獄だった。

陽がのぼる前には起きて、人気のない場所を渡り歩くようにしてごはんを探す。

ごはんと言っても、ちゃんとした黒パンやシチューは望むべくもない。昼間は、ごはん屋さんの裏に捨てられたくず野菜を拾って、夜は、屋台のおじさんやおばさんが捨てて帰ったくず野菜、石畳に落ちた食べカスを口に運ぶ。もちろん、どれも生ゴミ臭い。

ほんとうにときどき、屋台の売れ残りが捨ててあることがある。とても美味しそうだけれども、わたしは食べることができない。ごはんを探しているのはわたしだけではないからだ。わたしよりずっと身体が大きな子が、そのご馳走をめぐる争うのだ。力の強い子、足の速い子だけが、ご馳走にありつくことができる。

それを、わたしは眺めているだけ。黒パンやシチューはどんな味かするのか想像しながら。

「いいなあ……」

未練はつきないけれども、いつまでもこうしては居られない。人がやって来る前に動かないと。

昼は、なるべく目立たないようにしないといけない。

わたしのようなスラム街の子供は、大人の標的だ。鎧姿の大人は、わたしたちを見かけると意地悪をする。大人の連れて行かれた子は、ボロボロになって帰ってくるか、二度と帰ってこないかのどちらかだ。

「早くごはんを見つけないきゃ」

わたしは、頭からフードをかぶって耳を隠す。服のなかで尻尾を腰に巻き付けて。それでも、ご馳走のことが頭から離れなかった。

だからだろうか。

あの人が近付いてくるのに気づけなかったのは。

「くつくつくつ。これはこれは、ちよつど良い」

路地裏の生ゴミあさりに夢中になっていると、後ろから声がした。

男の人だ。鎧の一部をあちこちに付けた、「軽鎧」とかいう格好。つまり、乱暴でこわい大人だ。捕まると、きつと痛いことをされてしまう。

なんとか走って逃げようとするけれども、すぐに捕まってしまう。

「っー」

「捕まえたぞ。禄に食べてない、ガリガリひよろひよろの子供の足で、俺から逃げれるとも思ったか」

「……………」

必死に手足で殴りかかって抵抗する。けれど、相手は身体のおおきな大人だ。拳にどっしりした、まるで木でも殴ったかのような感触が返ってきて、ああこれは逃げれないと痛感してしまう。

そうこうしているうちに、この人はわたしをどンドン、どこかへ連れて行く。

すれ違う人たちが、ニヤニヤとわたしを見てくる。ギラギラした、怖い瞳。それをわたしは知っている。他人の不幸を悦ぶ目だ。

脳裏に、大人に連れて行かれた子たちの姿がよぎった。あの子たちはひどい乱暴を受けて死んでしまうか、そうでなくとも、もう動けないくらいボロボロになって帰ってきた。今度は、わたしがそうなる番なのだ。

そう思うと、抵抗する気力も失せて、手足から力が抜けてしまう。そんなわたしを見て、男の人は嬉しそうに笑った。

「くつくつくつ。抵抗しても無駄だ。お前はこれから、この世の地獄を見るんだ」

この日、わたしの人生は終わってしまうのだと思った。

男の人は、わたしを宿に連れこんだ。

受付にいた宿の人は良い顔をしなかったけど、男の人がそつとお金

を握らせると、何も見なかったフリをした。

立派な宿だ。

床はキレイで、埃くさくもなければ生ゴミが落ちていたりもしない。しっかりした屋根や壁まであるので、雨風にさらされることもない。いつもわたしが寝ている路地裏とはおおちがひ。

(こんなところで寝ることができたら、どんなに快適なんだろう)

なんて現実逃避していたけれど、ふと気付いてしまう。ここから逃げ出すのは難しそうだなあと。

「そうら、ここがお前の監獄だ」

ガチャリと鍵のかかる音がする。もうどこにも逃げられないと悟って、それで、はじめて部屋を見渡した。

部屋は、広かった。

物が少ないから、そう見えたのかもしれない。ベッドと机、水のはいった壺、空の桶があるだけ。

となると、イヤでも目に入るのは床だ。石造りの寒々しい床。この立派な宿のなかで、それだけが、冷たくじめじめした路地裏を思い出させる。

そこにわたしは、力なくへたりこんで、ふるえる身体をかき抱いていた。すぐにでもやってくるであろうその時を、ただただ、ふるえて待っていた。

そんなときだ。

——コツ、コツ。

とドアが叩かれる音がしたのは。

「くくく。来たか」

男の人がニヤリと笑う。

すると、ドアが開いて、店の人がゆつと顔を出した。男の人に何かを手渡すと、ちらりとわたしをみて、そそくさと部屋を後にする。

思わず「助けて！」と叫びそうになったけど、その目を見れば、声は勝手にひっこんだ。路上のゴミを見るかのような、ひどく冷たい目だったから。

(やっぱり、そうだよね……)

分かっていた。わたしのよう汚くて貧しい子供を助けてくれる人などいないのだ。ひもじい思いをして、埃とゴミにまみれながら死んでいくのだ。

男の人は、そんなわたしの前に、ガチャリとそれを置いた。シチューとパンだ。

思わず喉が鳴った。

シチューは、色とりどりの野菜が入っていて、見た目からしてキレイだ。わたしの知るシチューとはちがう。生ゴミのなかから拾ってきた野菜くず。腐りかけの肉片。それらを水で煮た、鼻の曲がるようなにおいのするものが、わたしの知っているシチューだ。

そして、パンはこういうわけか白い色をして、ふんわりと柔らかさうだ。

ふつう、パンは黒くて堅い。ガシガシと噛んで、すこしずつお腹に入れる。すべて食べおわるころには顎が疲れてそれ以上にか食べようという気にならなくなるし、お腹の減りも遅いので、便利な食べ物だ。ところが、これは白くてふわふわしている。

そんな不思議な食べ物がパンだと分かったのは、噂に聞いたことがあったから。貴族や、おおきな商人、そして強い冒険者。そんな金持ちだけが、白いパンを食べるのだという。

そんな豪華なごはんの乗ったきれいなお盆を、男の人は、これ見よがしにわたしの前に置いたのだ。

(そっか。この人はきつと、すごい冒険者なんだ。わたしなんかとはちがうんだ……)

みじめな気持ちがいんわりと、目に滲みはじめたとき、その人はワケノワカラナイことを言った。

「くつくつくつ。どうした、驚いて声も出ないか。それがお前の食事^{エサ}だ。どんなに嫌がっても、食べるまでここから出さないぞ」

さいしよは、聞きまちがいだと思った。けれども、その人は一歩わたしから離れてじっとしていた。まるで、わたしがごはんを食べるのを待っているみたいに。

(ほんとに、いいの?)

おそろおそろスプーンを持ってみる。

それでも彼は、ただ「くつくつく」と悪者みたいに笑うばかりだったから、

「……………ん！」

思いきつて、スプーンを口に運んでみた。

すると、その人は笑う。

「くつくつくつ。臭い液体と不味いだけのグルテンを食べて、えずくが良い」

不味いだなんてとんでもない！

野菜でつくったスープなのに、青臭さや、腐りかけのぬるりとした臭みがない。それどころか、深い味わいと、さっぱりとした甘さがあった。

甘い！ ああ、野菜って甘かったんだ。

「……………つ」

気がつくくと、わたしは涙を流していた。

こんなおいしいもの——ううん、ちゃんとした料理を食べることができたのなんて、いったいいつぶりだろうか。

いちど口を動かせば、手はかっつてに動いた。

パンはふわふわしていて、どういうわけか甘かったし、シチューにはなんと、肉まで入っていた。

夢中になって食べた。おいしいはずなのに、あふれる涙と鼻水で、途中から味なんてわからなくなっていた。あれだけシチューを飲んだはずなのに、喉がカラカラになっている。

「食ベきったか。だが、それで終わりじゃあないぞ。もっと涙を流せるよう、こいつもくれてやる」

そんなわたしの心を読んだみたい、空になった器になみなみと水を注いでくれた。

(お水だ……………！)

わたしのような孤児みなしこは、水を飲むのもひと苦労だ。

噴水にはこわい大人の人がいすわっていて、お金を払わないと水を飲ませてもらえない。そんなお金なんてあるわけないから、朝早くや

夜遅くにこっさり水を飲みに行く。それでも危険がないわけではない。同じように水をねらう人がやって来るからだ。

だから、ふだんは、器に雨水をためている。けれども、埃だつて入るし、夏にもなると一日もたてば水は腐ってしまう。こんなキレイな水は飲んだことはもちろん、見たこともなかった。

「……………っ！」

だから夢中になって、喉を鳴らして飲んだ。

(ひよつとしてこの人、いい人なのかな)

ほうつと一息つくくと、そんな考えが浮かんでくる。

(だって、おいしいご飯をくれたし、お水もくれた。怖いことを言っているけど、でも、じつさいに何か痛いことをされたわけじゃないし) そんなことを考えたからだろうか。

(ん……………眠い……………)

眠気がおそってきた。瞼が降りてきて、頭がカクツと下がる。

あわてて頭を起こすけれども、手遅れだった。イライラした声が降ってきたのだ。

「おい、何を勝手に寝ようとしている。ここをどこだと思ってる」

「あつ……………ごめ、ごめんなさいっ」

とつさに謝りながら、ああ、やつぱりと思う。この人も、やつぱりわたしに親切をしてくれるわけじゃないんだ。

彼は、ニヤリと悪そうに笑って、

「チツ。臭いな、ひどく臭う。鼻が曲がりそうだ。汚物は消毒しなくちやなあ」

「ひっ！」

ぬつと手を伸ばしてくる。

どうすることもができなかった。一日中ごはんを探して歩き回っているのです、脚はいつも疲れている。いちど座りこむと、すぐには動けない。

「オラア、その汚いボロ切れを容赦なく捨ててやる！」

あつという間にフード付きの貫頭着が剥ぎとられる。

「やめてくださいっ！ これしか服がないのに——あつ」

思わず声が出た。この服は、わたしの唯一の持ち物で、きつと、最後の線だ。どんなみすばらしい子も、服だけは着ている。裸の人なんていない。それがなければ、動物と同じように殺されてしまうにちがいない。

なにより、わたしにとって、頭と尻尾を隠せないことが問題だった。

「ほお。ここそしているとは思ってたが、猫人族か」

「ひいっ……」

どういうわけか、この耳や尻尾を見ると、皆冷たい目をする。ひどいときには、殴ったりしてくる。

そのときのことを思い出して、身体がふるえだす。

「ほお。臭いと思ったら、耳と尻尾から臭っていたのか。……チツ、やはりバツチイな。触っただけで手が黒く汚れる」

「いやっ！」

浮遊間。

両脇をつかまれて、おおきな桶に放り込まれる。そこには水が張ってあって、ばしやりと水が跳ねて床を濡らした。

彼は、空になった掌を上に向ける。

すると、なんとそこに、炎が噴き出した。

（魔法だ！）

はじめて見る魔法に、叫ぶことすらできなかつた。

大人の人は皆おおきくて怖いんだけど、そんな大人すらも、魔物はかんたんに食べてしまう。そして、そんな魔物でも、魔法使いにはかなわない。

大水を出したり、嵐を呼んだり、地面を割ったり、そして太陽みたいな炎を噴いたり。そんな精霊さまみたいなことができる特別な人が、魔法使いなのだ。

「へ火球」の魔法だ。どうだ、恐ろしいだろう」

男の人は、炎を見せつけてくる。ゆらゆら揺れる炎は、じゅうぶん離れているのに、ちりちり肌を刺すみたいにあつい。

（ああ、これで焼かれちゃうんだ）

ぎゅつと目をつむる。

何も見えないけれども、炎が近づいてくるのが分かる。ぶわっと汗が噴き出して、

(えっ)

けれども、それはすぐに頬を通り過ぎた。

ジュウつと音がして、おどろいて目を見開くと、桶の水がぶくぶくと泡を吹いているのが見えた。

「くっくっく。顔を焼かれるとでも思ったか？ 俺はそんな単純な虐待はしないぞ。もっとじわじわとお前を苦しめてやる。ほら、水がどんどん熱くなってきた」

(ほんとだ。きもちいい)

石畳の冷たかった水が、だんだんとあたたかく、そして熱くなってくる。熱いお湯に浸るのなんてはじめだったけど、ビックリしなかった。それは彼が、わたしの身体が慣れるのを待って、ゆっくりあたためてくれたからだ。

「熱いだろう？ だが、逃がしはしない。熱湯攻撃をたっぷり味わうが良い」

(こんな怖いことを言ってるけど、この人は、ほんとうはやさしい人なんだ)

そう気付いたとたんに、ふっと身体が軽くなる。肩の力がぬけて、腕をかき抱いていた手がほどけて、ぱしゃりと水面を打った拍子に、水が床にはねる。けれども、怒られることはなかった。

(このおにいさんは、やっぱりやさしい人なんだ)

すっかり安心しきったわたしに、おにいさんは、どこからか取り出した布を見せる。

(こんどは何がはじまるんだろう)

じつと見ていると、お兄さんはニヤリと笑った。

「ほう、気付いたか。そうだ、これは使い古しのボロ布だ。あとは捨てるしか使い道のないゴミ同然のクイツで、お前を苦しめてやる」

と言うなり、手にもった布で、ゴシゴシとわたしの身体をこすりだした。

痛いような、くすぐったいような不思議な感覚がして、思わずわた

しはくすくす笑う。

「痛い、痛いよっ」

「当然だ。お前の体表の細胞組織が剥離しているのだからなア！」

ニヤリと笑うおにいさんも楽しそうで、それが何より嬉しかった。こんなふうには、わたしのことを気にかけてくれる人や、いつしよに笑ってくれる人なんて、もうずっと長い間いなかった。

笑いつかれて、ぐったりと座りこむ。ちゃぽちゃぽ揺れる水面がお腹を撫でるのが、きもちいい。

おにいさんは、桶からわたしを引っ張りあげると、さっきのとは別の布で身体を拭いてくれる。ゴシゴシとちよつと乱暴だけど、それがいかにもおにいさんらしくて、なんだか嬉しくなった。

そうしてサツパリすると、とたんに恥ずかしくなる。水浴びなんてもうずっとしていなかったから、汗で身体がベトベトなもの、汗くさいのも、すっかり慣れっこになっていた。それが恥ずかしいし、なにより、おにいさんに裸を見られているのが恥ずかしかった。

そんなわたしの心を読んだみたいにおにいさんは、机の上に置いていたそれを手に取った。

「見ろ、これが何だか分かるか」

「……………っ！ わたしの服！」

「おっと、これを返してやるわけにはいかんな」

「……………どうするの？」

おにいさんは、悪だくみをするような顔をするけれど、もう見た目どおりの悪い人ではないと、わたしは知っている。それなのに、

「なに、簡単なことだ。捨ててやるんだ。こんなふうにな」

魔法でわたしの服を燃やしてしまったときには、ほんとうにビックリしたし、裏切れたと思って「ひどい、わたしの服が……………」なんて言ってしまった。

——そんなこと、あるわけないのに。

「ずいぶんと大切にしていたようだな。だが、お前にはもう服を選ぶ自由も無いと知れ。ほら、これがお前の服だ」

と言って着せてくれたのは、まっしろな、きれいな服だった。それ

は、わたしが着ていた服とはくらべものにならない。

そもそも、大切にしたくして、そうしていたわけじゃない。それしか着る物がなかったから、しょうがなく着ていただけだ。袖や襟はすり切れていたし、あちこち穴が空いていて冬は寒い。色だって黄ばんでいたし、あちこち汚れたしみついて変色していた。それを見るたび、悲しい思いがこみあげてきた。

そんな服を、おにいさんは燃やしてくれた。そんなの忘れちゃえつて言うみたいに。

（この人は、いったいどうして、こんなに優しくしてくれるんだろう）ふとした疑問が頭をよぎる。こんなことをして、何か得があるんだろうかって。けれども、ある顔が頭に浮かんで、そんな疑問はかき消された。

思い出したのは、お母さんの顔だ。病気になってみるみる痩せていった、起きあがれなくなつてそのまま死神様の国に行ってしまうそのときまで、わたしのことを心配してくれた。たいせつにしてくれた。

意地悪そうにわたしを見るおにいさんの目は、どういうわけか、お母さんの瞳にそっくりなのだ。

「こんな……こんなことって……」

気がつけば、わたしは膝をついて、胸からこみあげてくる熱い何かを必死に堪えていた。それは、鼻の奥をツンとつき抜けて、あたまをじんじん痺れさせた。

涙がにじんで、視界がぼんやりかすむ。

自分が泣きそうになつていいるのだと気づいて、おどろいた。お母さんがいなくなつてから毎日たいへんで、泣くことも忘れていたから。そうやって必死に生きていくうちに、涙なんてすっかり干上がってしまったのだと思つていたから。

「おっと、そこで寝るつもりか？ それは許さん。お前なんぞ、畜生同然の寝床が似つかわしい」

おにいさんは部屋の片隅を指さした。いつのまにか——わたしが泣くのをこらえている間に準備したのだろうか——そこには藁束の

ベッドができていた。それがわたしの寢床だと言う。ちゃんとした寢床で寝ることができると、いつぶりだろう。

気が付くと、わたしは肩をしゃくりあげて泣いていた。床に座り込んで、せつかくの服が濡れるのもかまわずに、えんえんと泣いた。

「チツ、グズめ。さつさとしないか」

そんなわたしを、おにいさんは優しくベッドへ運んでくれた。藁束のベッドはふわりと身体を受け止めて、ときどきチクチクするけれども、あたたかい。

もうこれ以上出しようがないと思っていた涙が、いつそうはげしく流れ出す。

「ありがとう……」

えぐえぐえぐきながら、なんとかお礼を絞りだしたつもりだけど、ちゃんと伝わらなかったかもしれない。瞼は重くって、身体はくたくたで、今にも眠ってしまいそうだったから。

おだやかな眠りに身を任せる直前。

「くつくつく、地獄へようこそ」

そんなやさしい声が聞こえた気がした。